

C-up ワールド

2003年4月号

2003年3月の山行記録

講習山行(月例山行)

安達太良山

3月15日~16日

参加者

(歩き隊)

岩崎元郎 (講師)
 日吉忠 (CU)
 鈴木保子・白浜鷹志 (JMIA)
 沢口千鶴子 (同人)
 沼崎栄子 (遠足)
 白石美智子 (シニア)
 日浅尚子・山野昭人・山野美香・福田洋子・
 柳澤栄一・田口浩昭・辻谷宏

(本科)

牧野国廣・本田サキ子・三川小夜子 (ゲスト)
 藤枝春美 (会友)

計18名

(スキー隊)

工藤寿人 (CL)
 金沢和則 (L)
 坂口理子 (同人)
 岩本一郎 (研究生)
 藤井佳子・宮崎和弘・宮崎恭子・小林真一

(遠足)

横川秀樹・浅子裕子・伊藤幸雄・小松清貴・
 宮崎将人 (本科)
 黒川伸一 (ゲスト)

計14名

コース・行程の概要

3/15(土) JR 大塚駅または大宮駅集合~貸切バスで
 奥岳スキー場~勢至平~くろがね小屋(泊)

3/16(日) くろがね小屋~安達太良山~五葉松平~奥
 岳スキー場~集合地

[歩き隊・スキー隊とも同ルート]

コースの核心 講習のポイント

- ・コースの核心
 安達太良山頂上鞍部から五葉松平へと続く、広い
 斜面のスキー滑降(スキー隊の場合)
- ・講習のポイント
 シールの扱い・シール登行時の板への重心のかけ
 方。ゲレンデとは異なる、悪条件下の雪質での滑
 降技術。
 そして快晴の安達太良山。(スキー隊の場合)

報告者のひとこと感想

とにかく晴天に恵まれた山行でした。私は山スキー
 隊で参加しました。

[1日目]前夜、私は2時間しか睡眠時間がとれな
 かったのだが、今回の安達太良山は、往復は貸切バ
 ス。車中で結構眠れた。やはりバスは楽だ。こんな
 山へのアクセスもたまにはいい。昼頃にバスは奥岳
 のスキー場に到着。スキー場で軽く滑ってから、ス
 キー場横の道からスキーにシールをつけて歩き出す。
 私は今回2回目の山スキーで、まだシール歩行に慣
 れていない。「少し後傾気味にして、後ろに体重をの
 せるようにするといい」との、工藤講師のアドバイ
 スが聞こえる。なるほど、歩くうちになんとなく感
 覚がつかめてきた。天候は晴れ。広々とした高原状
 の勢至平に出ると、左手に目指す安達太良山から鉄
 山へかけての稜線が望める。なんとも気持ちが良い。

本日の宿であるくろがね小屋に着いたのは夕食直
 前の17:30少し前だった。

メニューは名物のカレーライス。噂どおり、とても
 美味しい。私はおかわり2杯いただきました。夕食
 後、しばらくして小屋1Fの食堂部分で、小屋の管
 理人の橋本さんを中心に「歌の会」開始。さしずめ
 「山の歌声喫茶」といったところ。橋本さんのハー
 モニカ演奏の巧みさに加えて、その元気さにただた
 だ感服。橋本さんは、この3月で、小屋の管理人の
 定年を迎えられる。その労を共にねぎらうのが、こ

の山行のまたひとつの目的でもあるのだ。橋本さんのご挨拶の言葉。「感動は癒しです。感動を大切にしてください」という言葉がとても心に残った。

[2日目橋本さんの見送りをうけて、山スキー隊、歩き隊とも、AM6:30頃、ほぼ同時に小屋を出発。昨日に勝る快晴の中、1時間半ほど山頂直下の鞍部へ到着。ここでスキーをはずして山頂へ往復。私は兼用靴ではなくスキー靴なので、ここは少々歩きづらい。頂上からは360度の冬の大パノラマ！である。今回の安達太良山は本当に晴天に恵まれている。独立峰の要素のある冬のこの山には非常にめずらしいことらしい。しかし、今回初めての参加である私には、逆に吹雪の安達太良が想像できない。岩崎さん曰く、「安達太良で天候がいいのはかえって不幸だ。」なるほど、これは講習会なのだから、悪天候のほうがかえって勉強になる、というものか？複雑な気持ちではあるが、山頂からの風景を堪能するに、とにかくいい天気、気持ち爽快！であった。

さて、次はいよいよ、五葉松平へのスキー滑降開始である。スキー技術に不安のある私は、ボーゲンで他の人についていくのが精一杯だ。整備されたゲレンデ上の雪と違い、とても滑りにくい。雪が硬く、またでこぼこしていて、私の技術では足をそろえること不可能状態である。途中一部、雪が柔らかくなり、ゲレンデ感覚で滑れる斜面があったが、それもあつという間で、五葉松平へ着いてしまった。あとは樹林帯の中をゴンドラリフト終点までいく。リフト終点へ着いたのは10:00少し前で、結局ここまでは歩き隊のほうが早かったようである。。飛び道具(スキー)に頼らず、こつこつと確実にすすんだ方が結局は早いということか？(さしずめ人生のように[大袈裟な・・・])

いやいや。岩・沢登りをはじめとして、一般に登山というものは登っている間は、目標があつて緊張感もあるが、なかなか下りに楽しみを見出せない。(特に私は下りが嫌いである)一方、スキー登山は登り・下り両方を目的とできる唯一の登山形態でないだろうか。一連の行為の中に退屈がない。スキーの技術があれば、楽しみももっと広がると思う。そんな思いの、安達太良スキー山行でありました。

報告者 小松 清貴



自主山行

渡良瀬川付近の山々・石倉山・大萱山・ためき山・三境山

3月21日~22日

参加者

福田洋子(L)・伊藤幸雄(SL)・山野昭人・山野美香・田口浩昭、

計5名

コース・行程の概要

[予定]

足尾駅→大クツ沢→石倉山→大萱山→黒坂石キャンプ地(幕営予定)→カドバタ沢林道→ためき山→三境山→残間山→神戸駅

[結果]

足尾駅(10:40)→大クツ沢→石倉山(2:45)→1070分岐付近ビパーク(二日目6:00出発)→大萱山(7:00)→尾沢林道下降→(10:00)カドバタ沢林道→(熊糞山)→ためき山(2:00)エスケープで降りる事を決断→採石地の林道→サンレイク草木(4:00)

大クツ沢沿いに進むと、右の尾根こうすらとトレースがあるが、上部は鹿の防護ネットが阻んでいた為直進。両岸がその先V字の様相を強くして来たので、左岸がまだ登れる傾斜と判断。雪も付いていないので、トップに続き次々と登り始めるが、泥土と思っていた斜面は、靴をいくら強く蹴り込んでも入らない凍土になっており、それぞれ不安定な足場をなんとかザイルを出して確保。その場でアイゼンを装着。その後も50mぐらいはザイルでつなぎながら登攀。石倉山2:40到着。予測していたタイムを大幅にオーバーしている為、現在地を確認しながらビパーク地を選定。黒坂石分岐付近にツェルトを張る。4:00(積雪30cm以上)。大萱山より尾沢を下降(地形図に表記なし。エアリアでは途中まで林道が来ているが、あたりの伐採の様子から、最近になって尾根まで林道が伸びて来たようだった)。カドバタ沢を詰めて尾根こ上がる昨日のことがあったので、慎重にルートを選ぶ。各ピー

ク毎に高度と地形を確認。絶対の確信のためき山に到着。しかし、目印である△点が見当たらず、トップが焦っていると、後方より到着の二人に合図され、やっと木の梢にある△点を発見1:45。

コースの核心ポイント

1. 大クツ沢から入る石倉山までのルートは、事前に入山の記録を探せなかった。途中までは仕事道があると予測
2. 全行程を通し、残雪量が行程の難易度を左右すると思われる。
3. 地図上の等高線のピークを認識できるか、また等高線に現れない細かいピークをそれと判断できるか。
4. ショートカット、エスケープの判断

感想

まず、この地域の資料が限られていた為、所要時間の割り出しが難しかった。自分では下降に余り雪が残っていないようにと、北から南へのルートを作ったが、それ以上に凍土の登攀や沢をどの程度まで詰めて行くか、又エスケープに使う林道 自分の進む尾根なり沢をどのように交差して逃げ道に降りるか、地形図の示す樹木の種類や崖がそれをいかに表しているか(地図に無い道が出来ている事も)勉強になった。今回は雪のため踏み跡の確認もしやすく、破線や本に紹介された部分に関しては、まだ雪のあるこの時期でも人が入ってくるが、反面そのような紹介のないルートに関しては、鹿や猪、熊かもしれない糞(たぬき山の東南にあるピークは、熊糞山の山名板あり)仕事で入ったと思われる人の足跡などが錯そうしており、惑わされる。さまざまな場面での経験がマダマダ足りない事を実感した。

報告者 福田 洋子



投稿

シニア登山科/雪山登頂プラン
南ア・仙丈岳

3月21日~23日

収穫

登頂断念の決断を、いつ、どうするか。
雪山歩行の確認。技術の定着。

1日目=戸台スタートが7時50分。仙水小屋到着が午後3時30分。夏ならば、北沢峠まで一気に車で入ってしまうコースをてくてくと川原歩きや樹林帯歩きを続けてようやく到着。小屋まで標高1000メートルを登ったことになるが、あまりに長い道のりで、登ったという気分はゼロ。確かに八丁坂あたりは九十九折の坂が続いて「山登り」の雰囲気はあったが。小屋の一時手前の長衛小屋から堰堤を7つ越え、短いロープの箇所を渡り、谷間の坂を経て、小屋直下の急坂をよじ登るが、メンバーのほとんどがこれでもか、これでもかと続く堰堤こうんざり。もちろん、私もうんざり。

2日目=快晴5時10分出発。昨日の堰堤越えは、あれ? というほどあっけなく、仙丈岳五合目までもあっけなく。昨日の長歩きがほどよい足慣らしになっていたのかも。大滝の頭から小仙丈までは、ラッセルとまではいかないが、道をつくりながらの歩行。時々先頭を代わる。入山者は60才前後のご夫婦(とても健脚)と関西のS山岳会の数人、あと、単独の人たち。ご夫婦が大健闘で、かなりの行程を先頭で歩いてくださった。S山岳会はけっこうラッセル泥棒していたなあ.....。

小仙丈までは順調だった空模様が、雲が厚くなり、時折、雪が舞いだした。小仙丈からいったん、ナイフリッジを通過でぐっと一度下るが、ここがどうやら今講習の核心。偵察に行った太田講師は、尾根が非常に狭く、ちょっとバランスを崩すと下まで落ちるキケン箇所であること、通過にはロープが必要なこと、12人全員が通過するには相当の時間がかかり、12時30分と予定していた登頂時間を大幅に過ぎるであろうこと、などから、これ以上の登攀断念。

(年配のご夫婦は核心部を越え、頂上下近くまで進んだけれど、結局、予定の12時までには山頂に達せず、私たち同様、引き返されました)

山頂を踏めず断念という気持ちはまったくなく、むしろ、種々の条件を並べ、さあ、どういう判断をすべきか、という決断の勉強ができ、たいへん有意義でした。冬山は、12月の天神平で初めてアイゼンとピッケルを身につけ、富士山雪訓練、瑞牆山、金峰山、硫黄岳、伯耆大山、谷川岳雪洞、安達太良山などを体験しましたが、今回は、狭い稜線や一部急坂もあり、アイゼンやピッケルの使い方の確認が

できました。また、下山の時の足、体の重心など、冬山歩行も徹底でき、実りの多い、講習となりました。

3日目＝快晴。あったか。川原歩きは、ピクニック気分。Sさんは半そで。雪の照り返しを気にしながら、5時間で戸台に戻りました。

食料計画、所持品、体調管理、歩行、など、たいへんうまくいった山行でしたが、減点10点。3日目の下山で、木の橋を渡りましたが、「臆病、慎重」という氣質がもろに出て、及び腰、足元からふらで渡ってしまい、皆さんにとっても恥ずかしいところを見せてしまいました。気持ちが引けると、体がぎくしゃくしてしまいます。ほどほどの自信を持って、渡れば、どうということはないはずなのに。反省。

投稿者 日浅 尚子



投稿

C-UPコラム『新人クライマーのひとごと』

第5回

本科生のオススメ本なのだ！

■神々の山嶺／夢枕獯 集英社文庫

山歩きを始めたばかりの頃に夢中になって読んでいて電車を乗り過ごしたこともありましたが。基本的にはミステリーなのですが、主人公のキャラは森田勝さんをモデルにしていると知り、佐瀬稔さんの『狼は帰らず』などの佐瀬作品を読む発端となった小説です。(恵)

■ヒマラヤを駆け抜けた男／佐瀬稔 中公文庫

8000m峰14座完登にもっとも近づいた日本人登山家山田昇さんの生涯を描いたノンフィクション。読むだけで圧倒されてしまう世界なのですが、山田昇さんの名前は、現在アンナプルナ遠征中の山本篤さんが尊敬する人として名前を挙げたので知った次第です。本の中に山本さんの名前も出てきます。(恵)

■槍ヶ岳開山／新田次郎 文春文庫

槍ヶ岳に登ると槍沢に播隆上人がこもった岩屋が

あります。1828年にここを拠点に槍ヶ岳に初登攀したそうですが、初めて槍ヶ岳に登ったときはそんなこととは露知らず、何故そんな昔にこんなところにお坊さんがこもって山に登ったのだろうくらいにしか思いませんでした。

二度目に登ったときは槍ヶ岳を目指して歩いているうちにだんだんと大きくなっていくその姿に感動しました。頂上に祠がある理由も何だかわかるような気がしましたが、この小説を読んでから登るとまた一味違った槍ヶ岳が楽しめると思います。(恵)

■凍る体 低体温症の恐怖／船木上総 山と溪谷社

著者は医師で、大学時代山スキーでモンブランの氷河でクレバスに落ち、奇跡的に助かった体験を中心に低体温症について書いてあります。先日のTVでアンビリバーボーなお話として紹介されました。神経損傷からの長いリハビリ生活記録の記述など、ちょっと低体温症と無関係な記述もありますが、さっと低体温症を知るにはいい本です。(俊)

■ドキュメント 雪崩遭難／阿部幹雄 山と溪谷社

最近の雪崩遭難のいくつかを紹介しています。昔は雪崩が発生しなかったところでも最近では発生し、ベテランでも判断を誤るケースがあるようです。最近では冬でも暖かい日が多かったり、アラレのような弱層になりやすい雪がよく降ったりするそうなの... 表層雪崩の実際を知るには良い本でしょうか？(全層雪崩はどうなのでしょう？)(俊)

■続・山で死なないために／武田文男 朝日文庫

表題の印象とは異なり、日本内外での登山の色々な問題点やエピソードが書かれている。最も印象的なのは井上靖の「氷壁」のモデルとなった事件である。ナイロンザイルの改良の歴史が簡潔な文章にまとめられている。現在我々が安心して使えるのも、尊い犠牲やそれを無駄にしないという周囲の人間の執念のおかげであることが心に沁みる。(昭)

■わかりやすい天気図の話／日本気象協会編 クライム

天気図が書けるようになりたいと思い、インターネットで検索して購入した。期待通り、前半の殆どが天気図の書き方に充てられている。例題を解いているうちに、自然と16方位や等圧線に慣れること

ができ、天気図が書けるような気分になってくる。最初は何の感慨も湧かない表紙だが、この本を読み終える頃には、思わず見つめなおしてしまう。表紙には熟達者による手書きの天気図が示されている。(昭)

■山の本いろいろ

「山岳小説」には、実在の人物や事件をモデルにしたものが多い。山岳という限定された舞台ではリアリティーある作り話が難しいからだろうか。新田次郎の「孤高の人」(新潮文庫)のモデルは加藤文太郎だが、加藤の「新編単独行」(山と溪谷社)を読むと、すき好んで単独行にこだわったわけではないことがわかる。「孤高の人」は「新編単独行」とセットで読んでこそ、と思う。

夢枕獏の「神々の山嶺」(集英社文庫)の一部は森田勝がモデルで、これは佐瀬稔の「狼は帰らずーアルピニスト森田勝の生と死」(中公文庫)と併せて読むとぐんと面白い。ついでに、「神々の山嶺」はコミック(集英社)にもなっていて、画の谷ロジローは、「K」(双葉社)も描いている。「K」は、「ゴルゴ13」や「ブラックジャック」の山版の感じ。笑っちゃうくらいにコテコテの劇画(例えば、氷壁を登るのに、突風を利用し体を風にあおらせ、手だけで、つまり逆立ち状態で、鯉のぼりみたいな格好で登る、という具合だが、なぜかこの主人公Kに魅かれるのであります。

山を始めて、読む本の8割は山の本になってしまった。本屋に行っても、まずは、山の本のコーナーだ。山行の電車の中では、森村誠一の肩のこらない山岳ステリーを読む。時間つぶしにはもってこい。そういえば、最近文庫化された「マークスの山」(高村薫/講談社文庫)は南アルプスが舞台。高村薫は山をやる人なのかそうではないのか。「登ってないんじゃない。単なる取材よ、彼氏とかは山やるかも知れないけれど」とは山やのFさん。高校・大学と山岳部で鍛えた職場の先輩Sさんは「あれはぜったい、登ってるね。山やりそうな、顔してるしさ」。さて、どっちなのでしょう。

山の本の中で、特に関心があるのが、遭難あるいは奇跡の生還のたぐい。もっともおすすめるは「生と死の分岐点」(P.シューベルト/山と溪谷社)。リアルです。具体的です。残酷です。だから、気持ちが引き締まります。筆者はドイツ人。緻密です。国内の

本だと、とりあえず「生と死の分岐点」のような学術的遭難本が国内でも書かれるべきなのに「ドキュメント雪崩遭難」(阿部幹雄/山と溪谷社)と「凍る体—低体温症の恐怖」(船木上総/山と溪谷社)。「雪崩遭難」は、先日の谷川岳サバイバル訓練の前日に読みました。雪崩は怖い!と思ったので、あえて、イの一番に埋めてもらいました。怖いことは、さっさとやっしまえ!ということ。

登山家が著した記録やエッセイ、山岳ドキュメントの分野には、素晴らしい作品がたくさんある。川崎精雄(「山を見る日」「藪山 雪山」)は深田久弥よりずっとよいと思うし、小西政継にはもっともって登って、たくさんたくさん書いてもらいたかった。奥さんの小西郁子さんの「小西さんちの家族登山」(山と溪谷社)は素晴らしい子育て論・家族論。この本にもっと早く出会っていたら、私の子育ても違ったものになっていたのに・・・。(尚)

編集(秀)

編集局から

3月号は体制に大きな変化もあって休刊になってしまいましたが、今月号からまた新たなスタートを切りました。自主山行原稿、投稿原稿が多くなってきて内容も楽しくなってきた感があります。4月も雪山・沢などの自主山行が多いようで、多数の山行原稿期待しております。よろしくお願ひいたします。

「本科生のお勧め本なのだ!」というような、あるテーマで本科生の投稿を募って編集する特別企画風のコラムも楽しいですね。秀さんがまとめられたものです)

お勧めの本といえば、沢の本もありましたね。山塾主宰の書かれた「沢登りの本」は、山塾の基本図書ですので、沢関係では1番初めに読んだ本でした。沢登りなんていう登山形態はほとんど知りませんでしたから、高巻きとか、へつりとかいう用語を仕入れた本でした。あとは高桑信一の「道なき采への招待」なども読みました。昔、サンカと呼ばれる山の民は沢・沢沿いの峠径から目的地までの数百キロにおよぶ行程を、いちども里に降りることなく山中を移動したという記述にロマンを感じました。昔の日本は平野部しか大和尊臣の支配が及ばず、村を一步出た辺境(山地)に住む民は、鬼とか、まつろわぬ

者とか呼ばれて恐れられていたそうですね。沢径と尾根道を組み合わせて、大和朝廷も及ばないネットワークを構築していたのだろうか？などと想像するとちょっとワクワク感を感じます。時々天皇家も(余った?)皇子を鬼一族に養子を出して彼らとの関係を維持していたとかいう妖しいお話もあるようですね。(説によると豊臣秀吉もそういう高貴な血筋の人だったとか?)そんな鬼、サンカの民になった気分で、自分も沢を登って里人に知られずに遠くまで行動してみたいなどと思った次第です。沢を使えば結構山の奥に入れるということを認識させられた本でした。

アドレス

無名山塾

<http://www.sanj.c.com>

Phone 03-3941-3481

Fax 03-3941-3482